

第 26 回富士山写真大賞

審査員 三宅 岳(写真家)

総評

今年＝2025年の新語流行語大賞候補の一つに『チャッピー』という言葉があがっていた。どこぞのアイドルさんか、有名人の飼い犬か。とにかく聞いたことが無い。

「昨日もチャッピーと話していました」「毎晩チャッピーにお世話になっています」こうインタビューに答えていたのは街角のお嬢さん方。チャッピーさんは庶民的な人気者かと思っていたら、何のことはない。チャッピーとは「チャットGPT」の略称だという。どうやら対話型AIと日常的に会話する方がずいぶんいるということか。

一方、同じく新語流行語大賞候補として、『緊急猟銃』や『クマ被害』といった言葉もノミネートされていた。確かに日々のニュースや報道番組にわんさか登場した言葉である。幌尻岳での悲惨な事故を皮切りに、この秋は毎日のように熊出没、さらには人々の殺傷という痛ましい話を聞き続けた。わずかではあるがツキノワグマの生態調査で山野を歩いた経験もあり、なんとか人とクマが共存できないかと思っているが、情をはさむ余地が少なくなった。インターネットを開けば、毎日のように飛び込んでくる熊画像。あまりの多さに驚くが、一方で、その熊画像に偽物が紛れ込んでいるという話も伝わってきた。フェイクだという。

どうやら『チャッピー』さんに『クマ被害』の画像、などと注文をすると、いかにもそれらしい画像(あえて写真とは呼ばないでおこう)が仕上がってくるのだとか。試してみたら、なるほど、なんとなくそれっぽい画像(でも、ちょっと見たことないクマではあったが)が仕上がってきた。

あからさまに偽画像だが、チラッと眺めただけでは真に見えてしまう仕上がりである。ウソから出たマコトとマコトからでたマコトとの区別がつかなくなってきた時代を痛感した。

* *

真を写すから写真なのだ、と長年考えていたがその考えにも揺らぎが生じてきている。

発端はゴミ取りであった。デジタルカメラになって以来、センサー上のゴミが黒点となって映り込むことは作品にとって大きな汚点であった。それを除くには、コンピューター上ではあるが、丁寧に一つ一つ潰してゆくの常であった。これは、銀塩白黒時代から行われてきた「スポッティング」という作業に似ており、ある種職人芸的な緻密さも求められていた。ところが、最近では画像編集に AI が活かされて、あっという間にその黒点を除去出来るようになったのである。黒点周囲の状況を AI が判断して、何事もなかったかのように、埋めてしまうのである。なんて楽なことか、と思う反面、その簡単さに「これは写真なのか」という感覚を覚え始めたのだ。

歴史的に見れば、写真は絵画の延長線上にある表現活動である。精緻な表現を求めるカメラオブスキュラという投影装置に、銀塩の化学反応という記憶媒体が交わり、写真という表現にたどり着いたのだ。そして、ほとんどの写真表現、それを支える機材は、より精密精緻な再現を求める方向で、技術的な歴史を重ねてきていたのだ。光学はもちろんだが、機械工学から電気工学へと連なるその歴史が、ある意味で飽和状態になった着地点が現在なのである。

ある意味、というのは、つまり作品を作るための支えとなる機材という意味である。医療や工業などの分野では、さらに精密なナノレベルでの精度が要求されているが、いわゆる写真作品を生み出す、というだけの条件なら、多くの写真機材に、不満らしい不満がなくなっている。そんな時代に突入してしまったのだ。

機材の進化とともに写真そのものも画像素材ということになり、多くの脚色が容易に出来る時代になってしまった。

コンピューター、あるいはそのハンディー版であるスマホ上でも、色や明るさ、あるいはその形でさえ簡単に変えられるのである。いやいや、実は撮影している段階でカメラの内部でかなりの操作が行われているのだ。わかりやすい例を挙げれば、暗部の補正である。明るいところを基準にして撮影すれば、暗い部分のディテールは黒一色に潰れた描写となるというのが、従前の写真というものであった。もちろん、多少のテクニックで暗部を明るくしてくることはできるのだが、そこは撮影者の意思、そして腕がものを言ったのである。ところが、それがボタン一つで容易にコントロール出来る。いやいや、コントロールなどしなくてもカメラが勝手にやってくれるのが現代の状況である。同じようなことが、さまざまある。深度合成やハイレゾ撮影だって、今までにはない描写なのだ。さらにコンピューターを使えば、写っているものが容易に消去され、写っていないものが付け加えられる。様々なことがカメラ内でさえ勝手に行われたりするようになってきているし、また自在に意図的に表現も出来るようになってきている。

この時代に、従前路線の写真コンテストがどこまで太刀打ちできるのか。

写真大賞を掲げるコンテストにあっても、評者には大きな問題になってきている。

* *

富士山写真大賞でも、加工や調整がどこまで認められるのか、など今までにない議論がされるようになってきた。難しい話だが、ある程度の目安は必要である。

そこで結論である。根拠はないので暫定的で恣意的結論だが、写真大賞評者としての指針としてまず表明しておこう。実に曖昧だ。曖昧だが明確なのである。

それは、「選者がヨシと思う作品を選ぶ」、ということに尽きる。

きわめて乱暴で答えにならない答えだが、応募される方の胸に刻んでほしい。民主的な合議ではなく、選者の指向意向意思こそが順位なのである、とおぼえてほしいのだ。写真大賞を選ぶのは、チャッピーではなく感情ある人間なのである。たまたまではあるが、ここ数年は、小生＝三宅岳という人間がその感覚を最大限に活かして作品を選んでいる。もちろん、良い写真を選ぶ、という点は共通理解である。その上で、最後の最後まで選んで順位をつけるという時には、選者が養ってきた写真を見る目で順位をつけるよ、ということなのである。

なんとも手前勝手に聞こえるかもしれないが、もはやこの選者の視線、意思こそが、写真コンテストの最後の砦である。選者がどういった考えなのかは、過去の入選作を探る、あるいは著作物を眺める、書籍やネットでその活動を探るなど、多くの方法がある。そこから滲むものを汲んでほしい。それではあまりに突き放した書き方と感じられる方もいるであろう。そこで三点だけ記しておく。

その 1. 誰も見たことのない富士山を見たい。これは、以前にも書いているが、新鮮な視線は驚きである。既視感のある作品では上位入選は難しい。

その 2. つまらない合成や加工は好きでは無い。例えば、写ってほしくないものを消去する、といったことは撮影段階で考えるべき事だと思っている。撮影後の加工で消してしまうようなまねはしてほしくないと考えている。

その 3. 地に足ついた撮影であってほしい。これはドローンが一般的になった昨今ならではの思いである。

なお。大前提として、二重応募はやめていただきたい。選者にはチェックしきれない事なのである。あたりまえではあるが、撮影者の矜持としていただきたいものなのである。

ここまでずいぶん長い前置きになってしまったが、選者としての立ち位置をある程度はつきりさせてから、富士山大賞の評に入っておきたかった。今回の評も、今後の評も(機会があればだが)こういったスタンスで素晴らしい作品をチョイスして行きたいと考えているのだ。

* *

さて、それでは今回の富士山大賞について。まず参加者である。応募点数は前回とほぼ同じ。わずかに上回る 1,170 点。嬉しかったのはご当地富士＝郷土富士の応募点数が 14 名 31 点と増加したことである。

この規模からさらなる応募者の増加へと期待してやまないところである。そして、なお一層多くの方にドンと正面から富士山と向かい合ってもらいたいと考えている。毎年同じになるが、誰も見たことのない富士山を、写してもらいたいと願っている。

では上位作品について講評して行こう

金賞「鬘(たてがみ)」神足勝英さん撮影

削ぎ落した写真である。

シンプル。その味をどこまでもかみしめてみたい作品である。余分なものは画面にない。無駄がない。白から黒へ。色彩までも削ぎ落とされている。それでいて、富士山ががっちりと浮き彫りにされている。写真は引き算、という原理原則にのっとりた見事な作品といえよう。

多くの応募作品が富士山だけでなく富士山＋αという方向で作品を作り上げている。もちろんそれも悪くはない。しかし、富士山そのものだけで、その力を一気に引き出してくるという絵には、代えがたい力強さが溢れているのだ。写真は時代に翻弄され、テーマの横にあるモノたちによる影響も大きい。あえてそういったものを除外した潔さにグイと引き込まれてしまうのだ。これぞ富士山であり、そして作者の力量といえよう。

過去の講評でもしばしば触れているが、この引き算をしっかりとしている作品は多くない。

冒頭に長々と記した文章をしっかりと具体化している作品だとみていただくのも良いだろう。力強く金に輝く一枚となった。

銀賞「幻想富士」筒井章さん撮影

落ち着きのなかに華やかさがある。華やかだが派手ではない。富士山という山は時にここまでシックでゴージャスな着こなしもする山なのである。そして、ちょこっとかぶった笠がなんとも良いアクセントになっている。

富士山は 3 千メートルを遙かに超える高峰である。しかも、海近くから徐々に高度をせり上げてくる単独峰である。必然、海から吹いてくる高湿の風にとって大きな変曲点になるわけである。他にも様々な条件が加わり、富士山はしばしば気象の変容点になる。

風が叩きつけ雲が急激に湧き、霞があつというまに覆い尽くす。その気象の生み出すダイナミックな変身劇は、時に富士山の表情を短期間に大きく変えるのである。富士山の写真を撮る者にとっても、そのダイナミックな動きは見過ごすことの出来ない大きな魅力である。

しかし、その変容に、惑わされ続けると、いつのまにか富士山を撮りながらもその主題は富士山ではなく、その場限りの気象条件にすり替わってしまうのだ。それなのに、撮影者がそのことにナカナカ気がつかないという不思議なことが多々起こってしまうのである。

そういった条件に惑わされる訳ではなく。テーマ富士山をしっかりとした上での、装いの美しさまでを捉えた

作品。品があると感じられた。(なお、これは本質的に大きな余談だが、選者は笠に少しだけ情を傾ける癖がある。)

銅賞「サヨナラ富士山」加藤利忠さん撮影

例えば人類が世代交代をする標準的タームが30年だとする。すると2000世代を重ねてようやく6万年、およそ2666世代を重ねて8万年である。はたして人類はそこまで歴史を重ねることが出来るのか。

2024年。夜空に見事な尾をたなびかせたのが「紫金石アトラス彗星」であった。忽然と、まさに彗星のごとく現れた彗星は、秋には肉眼でもしっかり確認出来るまでに明るくなったのである。そうなれば、まさに2024年ならではの被写体として多くのカメラマンが狙うことは必然であった。ちりばめられた星々を切り分け。まるで富士山を目指すかのように長く尾を引く彗星。それを黙って受け止めるかのような静寂の富士、さらに手前にひろがってくる黄葉の唐松林。これぞ見事な構成という仕上げの写真がこの一枚である。

昨年度のコンテストでは、東海道新幹線を走るドクターイエローと富士山を絡めた優れた写真が多かった。これはドクターイエロー引退という報道を受けてのものであったが、同じように、この彗星も今は地球からどんどん離れて行く最中である。次に地球人が目にするのは6万年後あるいは8万年後とも言われていたが、一説ではもう再び戻ることはないとも言われている。写真は時を止める芸術でもある。今、その時でしか撮れないものを大切にしておきたい。

それでは、6点の優秀賞について

優秀賞「春風にのって」小林忠さん撮影

対比で魅せる、というのも写真表現である。明と暗、白と黒。そして、静と動も重要な要素となる。静としての富士山をおくにどっかりと据えて、手前の草原で動を表現する。見事な対比である。手前のアウトフォーカスが少々煩雑で優秀賞に留まったが、さらなる上位まで紙一重と感じた作品である。

優秀賞「朝日を浴びて」島田穰さん撮影

朝日であろう。まさに刺すようにして水平に近い角度で切り込んできた光。シルエットで浮き彫りにされたのは雷鳥の家族。そして、背後には黒々と富士の姿。いわゆる決定的瞬間を的確に捉えた一枚である。おそらく南アルプスに登っての撮影だ。その完成度の高さには舌を巻くが、主題が雷鳥という写真なので、この順位に留まった。

優秀賞「初雪為す彫刻」千葉壮紘さん撮影

テーマに切り込んで行く。壮大な富士山。その一部で表現を完結させるというのも写真ならではの表現である。周囲をバサッと切り捨てることで、具象ながら抽象とも見ることが出来る不思議な文様となった。実は選定時には天地もわからずに、ちょうど90度回転した状態で選んだ作品でもある。選の後、裏書きを見て正しき天地を認識したのだが、天地を意識させぬ、ということも抽出の妙と感じ、選から外すことはなかったのだ。

優秀賞「炯眼」中村祐太さん撮影

斬新なフレーミング。斜めに横切る山。高コントラストでの構成。そして、引き締まった黒。かつてフィルム

時代には様々な技術ノウハウを駆使して、画面を整理していったが、その時代の秀作を思い起こさせるような力強い写真である。黒く引き締めてディテールを見せないのも粋。フィルム時代なら「焼き込み」と言われたテクニックと同じようなことで、黒く締めたのだろうか。

優秀賞「真冬の鼓星」渡邊謙さん撮影

ここ数年で増えてきているのが星景写真での応募である。星空と景色を両立させる写真で。デジタルカメラが高感度で使えるようになったことで、多くのカメラマンが撮るようになった。何点もある募集作品のなかで、この一枚は明るさが際立ち、オリオンが目立つ。とにかくファンタジックな印象が強く残った。星の輝きが妙に柔らかいのは、何かフィルターを駆使しているのだろうか。可視と不可視のあわいを楽しめる作品である。

優秀賞「氷筈洞窟」渡邊守さん撮影

富士山は活火山である。そして、かつて発生した多くの噴火は、その周囲に様々な影響を及ぼしている。例えば流れ出た溶岩流は地表を覆うのみならず。そこに幾つもの洞窟を生んでいるのだ。風穴や氷穴として知られるその一部は、人気の観光スポットにもなっている。それもまた富士山なのである。洞窟と氷筈。こういった地史的な景も富士山写真大賞にふさわしいテーマであり、しっかり作品化に成功した一枚となっている。

以上が優秀賞までの評である。これに続く入選作は、いずれもが、あと一步で優秀賞に入れ替わる作品ばかりというのは、毎年同じである。その紙一重をどうやって越えて行くか。さらなる一年の精進に期待したいものである。

今年は特に富士山に登っての写真が少ないように感じられた。その中で、優秀作に溶岩に開いた穴（風穴？氷穴？）の写真を選べたことはなかなか嬉しいことであった。

最後に、少々くどいが、これからも油断することなく富士山と対峙し、心を込めてシャッターを切っていただきたい。写真作品として胸を張れる作品で堂々と応募をしていただきたい。選者相変わらず願うところである。